

**中央教育審議会 初等中等教育分科会
幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会
—第7回会議の主な意見等の整理—**

※「審議経過報告（案）」中の項目に即して整理。

1. はじめに

- 一人一人の子供のよさや多様さを受け止めながら、子供が互いに育ち合う教育の在り様は、幼児期だけではなく、小学校や中学校等にも当てはまるかもしれない。そうした中で、カリキュラムは大人が決めるものではなく、子供の声を聞いたり、子供だけでなく家庭とも対話をしたりしながら考えていくものだと思う。【再掲】

2. 背景

- ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度の例として、①として批判的に考える力、それから、②として未来像を予測して計画を立てる力と続いている。架け橋期の子供に求められる姿として、批判的に考える力が最初だと誤解を与える可能性もある。幼児期には、共感力とかがベースにあり、その上で論理的に考える力とか批判的に考える力が発達してくるのが大事である。
- 新型コロナウイルス感染症流行下の状況で、家の生活の中では子供の外遊びが減ったり、おもちゃ遊びや動画の視聴等が多くなったりしてきている。園では外遊びが減っているわけではない。
- 実際の保育の現場では、小学校との交流は、現在のコロナ禍の中で停滞若しくは後退している。オンラインなどのICT機器を活用を含め様々な工夫をしながら幼保小の交流を行うことが大事である。
- ICT機器の活用について、職員同士、研修や連携協議会はもちろんのこと、例えば、子供同士で作る学校動画紹介や子供たち同士での会話ができるオンライン交流など、目的を持って関わるのであれば、子供たちにとってよりよい学びにつながるものだと思う。接続を進めていく中で、義務的ではなく、有意義な時間となるような内容を考えることが大切である。
- 「全体的な発達を促していくことに配慮し」では、少しぼやけてしまうので、「全体的な発達を促していくことを基本としつつも」とした方がよい。その次の行の「着実に計画を作成し」は、計画が指すものが曖昧なので、個別の指導計画あるいは個別の教育支援計画といった言葉を入れ、それを小学校に引き継ぐとした方がよい。また、注18が、通級ではなく特別支援学級のことになっているので、通級による指導のデータとした方がよい。
- 外国人の子供の指導の充実について、例えば母語支援員の配置や日本語支援員の配

置などの指導や体制の充実など、もう少し具体性を持たせた文言が入るとよい。

3. 課題

- 受皿となる小学校以上の先生方の意識向上に向けてもう一押し欲しい。幼児教育の方ばかりが情報発信している印象を受けた。
- 審議経過報告は、これまでの経験値に基づく提言が多いが、科学的なエビデンスがあると理解しやすくなると思う。例えば、接続期は、1つは本能的なものから、いわゆる人間特徴的な理性的な脳への変化が起きる時期である。この時期は、脳の構造では、抑制性の神経回路が非常に発達する。その発達を促すのは、言葉を覚える、会話を交わす、集団の中で様々な人と相互作用する、五感からの入力などである。まさに園から小学校にかけての教育が、いわゆる抑制性の神経回路、もっと言うと理性を育てていくことになる。
- 腸内の細菌が、我々が生み出すことができないような成分を生み出して、脳の中の発達を促したり、機能を整えたりしていることが分かってきている。腸の中の細菌は発達の段階や食べるもので入れ替わるので、統一した研究が難しい点もあるし、まだ分かっていないこともある。本能から理性に変換する脳の回路、この架け橋期ぐらい時期に抑制性の神経回路というのができていくときにも恐らく必要であろうと言われている。
- 子供の発育、発達といったもののエビデンス的について具体的に記載できるとよい。

4. 目指す方向性

(1)「社会に開かれたカリキュラム」の実現に向けた、教育の質に関する認識の共有

- 「社会に開かれたカリキュラム」について、カリキュラムと教育課程との関係についてもう少し触れた方がよい。カリキュラムは教育課程より広い言葉である。
- 例えば「教育課程」という言葉は学校教育に伴う用語なので、幼稚園と認定こども園と小学校にはある、保育園では教育課程という用語は用いていない。こうした用語の違いを踏まえて、ここではカリキュラムという言い方をしているのではないか。
- 「学校、家庭、地域の関係者が3要領・指針や小学校学習指導要領を幅広く共有し活用していく」について、家庭等が共有し、特に活用することは現実味がないように思う。
- みんなで子供を育てていくという、そういう志向のあるものが出来るのかなという期待を持った。
- 共有したい家庭や地域にアプローチすることが難しいので、手引きや参考資料に事例があるとよい。
- 「各分野の知見の集大成である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」という表現があるが、「各分野の知見の集大成である」との文意に違和感がある。
- 幼児期における ICT 機器の活用について、時間、内容等一定の配慮が必要であるこ

とを記載した方がよい。

- ICT を子供が保育の中で活用することによって能動的に関わることができ、先生から伝えられるのではなくお互いに伝え合う道具として使うことができる。また、子供が、自身の育ちを振り返る道具として使うこともできる。
- 幼児期における絵本の読み聞かせについてももう少し触れた方がよい。
- 自身の感情を表現できる言葉、語彙力が豊富な子供ほど、社会で頑張っていくたくましさといったことが身に付いてくるのではないかと思う。豊かな表現力を身に付けるための基礎的な力が、幼児期に身に付けていることにより人生が変わってくるのではないかと感じている。その基本は母語だと思う。
- 日本語力が育っていると小学校への移行もスムーズで、感情表現ができることでいろいろなさかきも減ると思う。感情を豊かにするということが言葉を豊かにすることと連動しているし、言葉が豊かであるとそれに対応する感情も育っていく。

(2) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と各園や地域の創意工夫を生かした幼保小の架け橋プログラムの実施

- 私立や民間の創意工夫を大切にしながら、本市の子供たちを小学校へつなぐというのは施設類型や私立や公立や違いなくやっていくことが大切であり、その趣旨が審議経過報告に記載されているのでよいと思う。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の定義、捉え方や生かし方が整理して書かれ、これを読めば、小学校の先生も含めて誰でも理解してもらえる文になっていることが大事である。今でもよくかけているが、もう少し分かりやすい方がよいと思う。
- 架け橋期のカリキュラム開発の目指す方向として、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手がかりとするとある。これに加え、育成を目指す資質・能力を視野に入れながら策定するといった文言もあった方がよい。
- 「幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培う」といったことが書いてあるが、小学校学習指導要領でも、例えば児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにするといったことが書かれているので触れた方がよい。
- 「幼保小の先生が互いの専門用語を」とあるが、専門用語ではなく、例えばお互いの子供理解とか子供への関わり方、使っている言葉などといった趣旨が伝わるように具体的な方がよい。
- 一人一人の子供のよさや多様さを受け止めながら、子供が互いに育ち合う教育の在り様は、幼児期だけではなく、小学校や中学校等にも当てはまるかもしれない。そうした中で、カリキュラムは大人が決めるものではなく、子供の声を聞いたり、子供だけでなく家庭とも対話をしたりしながら考えていくものだと思う。【再掲】
- 幼児教育の成果を踏まえ、小学校教育の質の向上につなげることも必要であるという箇所、いじめ、暴力、不登校がこのような形で記述されていると、これらを防ぐために小学校教育の質の向上があり、これは幼児教育の成果を踏まえると誤解される恐れがある。幼児教育が大事にしてきたことを小学校でも取り入れていくことが大切であることをもう少し分かるようにした方がよい。

- 小学校での問題行動として、自分の感情をコントロールできない、席に座ってられないといったことが挙げられる。実は、感情を表現する語彙力ない、体幹が弱く座る姿勢を保てないといった課題があることがある。その課題に対して叱責で対応すると、暴れたり不登校になったりするケースがある。そういった問題に対応するために、幼児教育を学びたいという小学校からの要望が増えてきた。一方で、美しい言葉とか豊富な言葉を教えれば身につくものではなく、気持ちを受け止めてくれる人、伝えたいという幼児の気持ち、自分がもやもやとくすぶっている気持ちを言語化してくれる大人の存在などを含め、子供の環境の整備することが大切である。体についても、全身を動かした粗大運動が滑らかにできるようになって、指先を使うような微細運動ができるようになっていわれており、そういった子供の発達について、小学校の先生方も含めて一緒に学び合う研修があるとよい。
- 座ってられないとか集中力の問題では、おへその下に中心を置くような在り方、腰の骨を立てること、臍下丹田を意識しながらゆっくりと呼吸することといったことも考えられる。
- 架け橋期のコーディネーターの役割や重要性を記載した方がよい。また、手引きと参考資料の中にも幼児教育アドバイザーとかコーディネーターという言葉は出てくるが、もう少し具体性があったほうがよい。例えば、参考資料は園で参考になる例が記載されているが、自治体での幼児教育アドバイザーなどの活用や成果の例があった方がよい。
- 幼児期は教科書や時間割がなく、小学校以上は教科書を使い、基本的に時間割がある。時間の在り方、学びの環境や空間の在り方について、架け橋期を鍵にして多様なリソースの学びの財の在り方全体を考えていくことがこれから求められることである。このことは、歴史的に議論をしてきたことであり、審議経過報告書は一つの大きな転機だと思う。
- 特別委員会に参加していない人達との熱意の差を感じるので、そうした人達にも伝わる方法を考える必要がある。架け橋期着手前後の変化が1枚で伝わるような絵があるとよい。その際には、小学校関係者が自分事となる工夫が必要である。

(3) 全ての子供のウェルビーイングを保障するカリキュラムの実現

- 架け橋期の教育の質の効果検証について、何をもって効果検証とするのかについて、今後、更に検討する必要がある。例えば、子供の主体性、ウェルビーイング、学びがより豊かになったというような個人の問題をアウトプットしていくのか、学校や園の連携、接続が各自治体で行われるようになったことを捉えるのか、それによって園と小学校の関係性や地域や保護者の参画が変わっていったということをつまめるのか。個人のアウトプット、長期的なアウトカム、さらにインパクトについて考えていくエビデンスが今後必要になっていくのではないかと。

(4) 幼児教育推進体制等の全国展開による、教育の質の保障と専門性の向上

- 養成校の教員が連携・接続を学ぶことが大切である。学生がインターンシップで経験したことを生かせる学習の深まりを考える必要がある。
- 乳幼児期や小学校の先生が、架け橋プログラムを通して、先生としてあるべき姿について自ら学ぶ姿勢が大切である。保育者としてキャリアに応じての成長を支える研修の体系化が大切である。
- 架け橋期の教育の質の効果検証について、何をもちいて効果検証とするのかについて、今後、更に検討する必要がある。例えば、子供の主体性、ウェルビーイング、学びがより豊かになったというような個人の問題をアウトプットしていくのか、学校や園の連携、接続が各自治体で行われるようになったことを捉えるのか、それによって園と小学校の関係性や地域や保護者の参画が変わっていったということをつかめるのか。個人のアウトプット、長期的なアウトカム、さらにインパクトについて考えていくエビデンスが今後必要になっていくのではないかと【再掲】

(5) 地域における園・小学校の役割の認識と関係機関との連携・協働等

- 「また、乳幼児健診を」の文章中、「日々の行動観察において発達障害等の早期発見」とあるが、園の先生方が発達障害の発見をする必要があるように読めてしまう。ここでは、関係機関との連携が大切なので、「就学時健診や日々の行動観察において」を削除し、「保健、医療、福祉等の部局と連携を図りながら、発達障害等の早期発見・早期支援に努める」としてもよいかもしれない。なお、乳幼児健診を行っているのは母子保健なので、「乳幼児健診をはじめ、保健」の方がよいかもしれない。